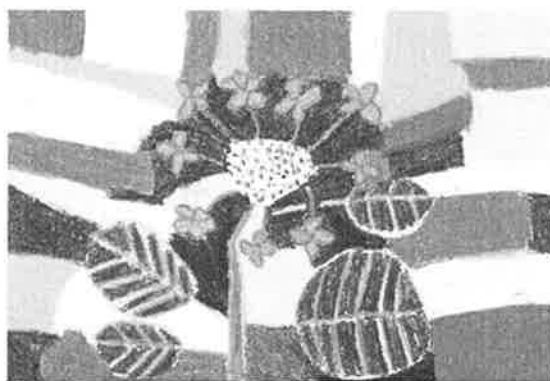


おもしろ子育て奮闘記

～よんで元気になる体験談～

Part.2



作成／平成 23 年度 わくわく子どもまつり in 岡山ドーム
公民館発達障害者支援グループ

は

じ

め

に

平成21年の『わくわく子どもまつり in 岡山ドーム』へ初めて発達障害ブースを設けたところ、予想以上に反響がありました。

平成22年は、「私はこんなふうに子育てをしてきたよ」「仲間がいるんだよ」という思いを伝えたくて、公民館などで活動しているグループの皆さんからメッセージを募り「おもしろ子育て奮闘記」を作成しました。

読んだ方からは「元気をもらった」「先を行く親の話が参考になった」「少し気が楽になった」など、多くの声を寄せていただきました。

そこで今年は、新たに公民館や親の会で活動している方に呼びかけ、Part.2を発行する事になりました。

紙面の都合により一部の方のメッセージ紹介になりますが、読んで元気や笑顔になれたらうれしいです。そして、一歩勇気を出して親の会や勉強会を覗いてみてください。あなたの気持ちをわかってくれる仲間と出会えますよ (*^~^*)

メッセージを寄せてくださった方々が主に活動されている会

- ♪ ほっとほっと（旭東公民館クラブ講座）
- ♪ 人・ふれあい・ひろば（光南台公民館主催講座）
- ♪ わたしの居場所さがし（中央公民館主催講座）
- ♪ ジョブサポート事務局そら
- ♪ NPO法人岡山県自閉症協会
- ♪ チューリップの会
- ♪ よつばの会

【表紙絵】NPO法人岡山県自閉症協会の皆さん

子どもと私に笑顔が訪れました

子どもが3歳児健診で、専門の病院に受診するように勧められ、診察を受けに行きました。

結果は広汎性発達障害でした。

以前から上の子とは色々違い、育てにくいと思っていたので、結果を聞いたときはとてもショックでしたが、反面やっぱりと思いました。

それまでは怒ってばかりの毎日で、子どものする事に振り回される毎日で、朝が来るたびに、またしんどい長い1日が始まるという気持ちの日々で、子どもと私の顔から笑顔が減っていましたが、病気だと分かってから私の気持ちの持ちようが変わって、優しく接するようになると、子どもと私の顔から笑顔が出るようになりました。

来年から幼稚園に入園するので、まだまだこれから大変な事があると思いますが、月に2回デイサービスに通って、先生方から教わりながら、地域の方々に支えてもらいながら、親子でがんばっていきたいと思います。

(こうちゃんママ)

寄り添い歩んだ6年間

大切な息子は歩くのも話し始めも遅く、かんしゃくを起こした時の異常な泣き方、頭を床に打ちつけてさらに泣き叫ぶ…、なんとなくどこかがちがうと感じ始めたのは1才を過ぎた頃でした。泣き方が異常なことや規則正しく並んでいる物を見る時の目が流れるような動きが気になり、小児科や眼科の先生に相談しても「様子を見ましょう」「ちゃんと見えているので大丈夫です」と言われるばかりでした。

そんな不安を抱え、ある時手にした教育雑誌で発達障害の特集が目にとまり、読んでみると息子の長所にあてはまる項目がいくつもあることに気がきました。この子の育てにくさはもしかして発達障害のせいかもしれない…と新たに不安になった事を思い出します。

その後、専門の先生と出会い、相談→診察とつながることができました。そこで初めて広汎性発達障害という診断名がつきました。この障害は一生治るというものではなく、この子に必要な支援を受ける事で生きにくさを軽減できる事を知りました。そして療育が始まり、最初は入室することすら難しい状態でしたが、回を重ねるごとに笑顔で参加ができるようになり、半年もすると参加の難しいお友達の応援ができるようになりました。また3才を過ぎると言葉がどんどん増えて、コミュニケーションが上手になったぶん、自傷行為もだんだんと目立たなくなってきました。

私自身も、息子のことを分かりたい一心で本を読みあさったり、講演会にもたくさん参加させて頂きました。まだまだ手さぐり状態の毎日ですが、言葉かけ1つで息子にピッタリはまった時の「よっしゃ！」という満足感は、定型発達のお子さんには味わえない幸せなのかなと思えるようになりました。

今は月2回の講座に楽しく参加させて頂いています。みなさんの話に胸が熱くなり、時には一緒に

涙しながら、これから同じように起こるであろう問題にぶつかるわが子を想像して、その時のためのアイテムをたくさん仕入れているところです。

愛しい息子は現在6才になり、とても心優しく、おだやかで笑顔がステキな子になりました。多少幼い面もありますが、しりとりをすれば私が驚くような言葉が飛び出し、絵を描けばいつものびのびと用紙いっぱいニコニコ明るい絵が描けるようになりました。

これからも次々に起こる問題に1つ1つ真剣に向き合い、彼のこだわりの強い面や変化に弱い面など、しんどいだろうなあと思う部分をしっかりフォローしつつ、成長を見守っていきたいと思います。

(アンパンマン号)

わが子が教えてくれたこと。

現在5年生になる息子が赤ちゃんの頃は、おとなしいけれどあやすとケタケタと笑い、笑顔がかわい子でした。「手がかからなくていいわねえ～」なんてママ友からは言われたけど、食が細く、人見知りでお友達の家に遊びに行っても私から離れられず、帰るころにやっと私から離れてお友達と遊ぶような子で、心配していました。

やがて幼稚園に通うようになりましたが、送ってきた私と別れるときに、私を笑顔で見送ってくれることは一度もありませんでした。そして、幼稚園では誰とも話をしませんでした。家に帰って友達と遊ぶときは話すのに、その友達とも幼稚園では一切話さなかったんです。

人と会っても私の後ろにまわって挨拶もできない。「お母さんが甘やかしたるんじやろう」「来年は1年生なのにどうなるとるん」と親戚から責められることもありました。

このころは、親の思うように子どもが動かないので、おだてたり、叱ったり、脅したり…。いらだちと不安が常に交差する毎日でした。

やがて小2で不登校となり、広汎性発達障害と緘黙と診断されました。この子に対する違和感は障害だったのだとほっとした反面、受け入れるにはとても時間がかかったように思います。しばらくは水を飲んでも全部涙になるんじゃないかと思うくらい泣き暮らし、精神科の先生に「このままでは、お母さんがうつ病になってしまうよ」と言われました。

病院の先生、学校の先生、周りのお友達に支えられて、私の気持ちが落ち着くと同時に子どもも落ち着いてきたように思います。小3より特別支援の籍に入り、小4からは不登校の不安なく楽しく学校に行っています。

野球が好きで、今は土日にはソフトボールチームに入って練習しています。出せない声をふりしほって頑張っています。学校で話せるお友達や先生も増えてきました。練習がきつかったり、学校で辛いことがあっても、口に出したり、解消することが苦手なこの子は、たまに練習や学校を休むこともありますが、何かあってもすぐに立ち直るすべを徐々に身に着けつつあると思います。

時にはこの子が障害を持って生まれてきたことを恨む気持ちになることもありますが、なによりこの子

のおかげで、「幸せになるってことはどういうことか」「子どもを育てるってどういうことか」を教えてもらえたと思います。子育ての楽しさ、周りの人へ感謝する気持ちを私に芽生えさせてくれたこの子に感謝しています。生まれてきてくれてありがとうと今は心から言えます。

まだまだ手がかかって、苦労もあるけれど、その分、嬉しいこともたくさんあって、そして、いろんな人と出会えて…、私は本当に今、幸せです。

(K)

数々の『困った』は乗り越えられる！温かい言葉と笑顔のステキな循環

我が家の長男は、知的障害を伴う発達障害と診断されています。家中の時計の時刻が同じでないとパニックを起こす(「時刻は一定のはず」という彼の信念)、雷の恐怖から曇りの日や雨の日には外に出られない、偏食、感覚過敏、不登校、などなど…。今までには数々の「困った」がありました。私には育てられないかもしれない、もう無理…と、何度思ったことでしょう。

けれど、あれから10年たちました。長男は今では15歳。

彼の趣味は料理と編み物です。小さい頃からよく一緒に料理をしたり、パンを焼いたりしていたのが今でも続いています。最近では、弟から「メロンパン作って」とリクエストされると「仕方ないですね～」とちょっと面倒くさそうに、でも半分嬉しそうにパン作りを始める長男。焼きたてのパンの味は最高です。将来の夢はパン屋さん！実現するといいな…。

小学1年生の頃から始めた編み物は、地域の公民館の編み物教室に参加するようになり、今ではおばあちゃんや私にセーターを編んでプレゼントしてくれるほどの腕前になりました。

長男がパンを作ると、周りの人が「美味しかったよ。ありがとう」と笑顔で覚えてくれます。長男が編み物をしていると「すごいね～」と言ってもらえます。周りの人の温かい言葉をもらうと、長男は笑顔になって、今までよりもっとやる気になります。編み物やパン作りの腕前が上達したのは言うまでもありませんが、そんな素敵につながりで、彼は今までの色々な「困った」を少しずつ乗り越えてきたように思います。学校には行けないけれど編み物教室には参加できる、編み物教室に行きたいから自分で電車に乗ってみる…。できる事が増えると、また自信となって次へのステップにつながる…。素敵につながりです。

中学3年生の長男。次の進路選択が迫っています。将来を考えると不安もありますが、ゆっくりゆっくり彼らしく生きてくれればそれが一番嬉しいです。

まずは5年後、家族みんなが笑って生活できていることを目標に、さあ、今日も1日頑張ろう。

あせらず、急がず、のんびりと……。

(ゆうきママ)

新しい家族と新しい故郷で支える「どっこい！子育て」

こんにちは。私たちの子育ては、なまやさしくはない。でも、かわいいわが子、授かったからには「どっこい！」引き受けましょう！

たまたま勤務で岡山にご縁があった私にとって、故郷九州は遠い。家族・親戚支援のない中で勤務と子育てを両立するのは容易ではありません。

「地域」という魅力的なキーワードも、少子化や生活の多様化で、子ども同士のスケジュール合わせさえ困難な時代です。また、そもそもやはり「地域」の連携は、子ども以前に親の交流が基盤にあるのと思います。私は、地域の親の会に所属しています。親仲間会員の率直で熱心な議論に身を引締め、活動を通して他のお子さんも我が子の様に思えます。また何より保護者以外の地域の会員が身内の様に暖かく厳しく支えて下さることで、励まされ力強く前を向くことができます。地域の親の会は私にとって新しい家族、地域の学区は新しい故郷のように感じています。

(人魚姫の母)

公民館活動に参加して

公民館活動に参加したきっかけは、二男の小学校で配られた、公民館における小学校4年生～中学3年生までの地域の子どもの居場所作り活動の案内チラシでした。臨月の身体で恐る恐る公民館を訪ね「障害があるのですが、参加できますか」と問いかけたところ、館長さんに「どうぞどうぞ」と笑顔で迎えられ、ほっとしたことを覚えています。慣れない場所と人に当初緊張気味だった二男も、ボランティアスタッフや公民館の方に可愛がっていただき、「居場所」としてくつろげるようになりました。私も三男のベビーラックを抱えて毎週公民館に通いました。障害のある子どもは保護者(または代わりの大人)付き添いという条件は、正直大変だなあと思いました。共稼ぎの核家族だからこそ放課後の支援が必要で、しかしさすがに毎日付き添いは見つけられない。息子の付き添いは誰でもよいわけではないからです。でも、どこにもいけず誰にも会えない放課後でなく、行ける場所があるという道を開いていただけたことは本当に有難かったのです。

館長さんの「保護者の方も、ボランティアスタッフや地域の人と顔見知りになる中で、得るものがあると思いますよ」との言葉に後押しされ、参加しているうちに、その意味を実感するようになりました。地域の小学校に二男が就学するとき、校長先生に言われた言葉を思い出します。「お母さん、人にしてもらったことばかり考えていませんか。地域のために何ができるか、考えたことがありますか」「すみません、と頭を下げる必要はありませんよ。堂々としていたらいいいのです」「どの子にも、社会の一隅を照らす光があります。それを見つけてあげてください」障がい児を育てることに、疲れ、被害感や警戒心で身を硬くしていた私には、思いがけない言葉でした。この校長先生の言葉と、その後の公民館活動との出会いが、私の「支援の必要な子どもたちのための活動」の原動力となっています。これからも、

仲間と、そして地域の方々と、やわらかく、無理なく、花を育てるような気持ちで、つながっていきたく
と思っています。

(かめちゃん)

お母さん友達が本当に心強かった

私は2年前の夏に、夫の転勤で大阪から引っ越して来ました。慣れない土地で、周りには誰ひとり
知り合いもおらず、少々不安な岡山での新生活のスタートでした。

引っ越した当時、中学2年生だった発達障害のある娘が、翌年に受験を控えていたこともあり、
「娘のためにも岡山のことをもっと知りたい」と思っていた矢先、市報で公民館講座が開講されること
を知り、すぐに受講を申し込みました。

この講座で同じ立場のお母さん友達がたくさんでき、月2回の講座の時間は、私にとって本当に
貴重な時間となりました。お母さん友達とは、困りごとの相談に乗ってもらったり、岡山の学校事情
(中学校や高校について)や進路選択、病院・クリニックについての情報など、具体的に教えてもら
いました。身近に頼れる友人ができて、本当に心強く感じました。また、講座の後のランチタイムも、み
んなでワイワイ話せて、とても楽しい時間です。

娘の受験に関しては、中学校の担任の先生やスクールカウンセラーの先生、塾の先生方にひと
かたならぬお世話になりました。入試までは娘と私の二人三脚で勉強に励み、第一志望の私立高
校に無事合格しました。今は、雨の日もカッパを着て、片道40分の道のりを自転車で通っています。
娘は行きたかった学校に通える喜びを感じながら、充実した学校生活を送っています。思春期なの
で、いろんなことがあると思いますが、ひとつひとつ乗り越えながら、大人への階段を上っていって欲
しいと思います。

(み～な)

子どものために、早い時期の相談を

一歳半検診で気になることがあると言われ、市のこころの相談を勧められ、その後病院で自閉症
と診断されました。二つ上の兄よりは発達が遅いかな？と思っていたのですが、診断された時は「どう
してうちの子が…」と、とてもショックで落ち込みました。

その後、病院からの紹介で、母子通園施設へ親子で一年通園と訓練に通いました。そして、保
育園へ三年、療育機関へと通園しました。小学校は地元の小学校に情緒学級を新設して頂き六
年間、中学校も地元の中学校の情緒学級で三年過ごし、その後県立高校を受験して、現在一年
生です。

一番思うことは、早期の発見をして頂き、訓練・療育を受けられたこと、その中での親同士のつながりは大変ありがたかったし、今でも仲良くさせてもらっています。親の会、サークルも入っての活動は親子にとって、とても良いものになりました。

自分の子どもが他の子どもよりも発達が遅かったりすると、心配で不安なことが多く、診断も受けたくない気持ちもあるかと思いますが、子どものために、少しでも早く専門家に相談を受けることが、後々の子どものためになると思いますし、いろんな方面からの支援も受けられます。

診断を受けた時は本当につらく悲しい気持ちでしたが、たくさんの方との出会いは一生続く大事なものです。悩みを共有できる友人ができたことも大きいです。子どもは一人では育てられないので、周りの力を借りていいと思います。これからも色々あると思いますが、頑張っていこうと思っています。

(N)

本人の成長を信じて！ …子ども自身がこだわりを解いたきっかけは

子どもは入学前に発達障害と診断されました。パニック、異常なまでのカードへのこだわり、2時間でも3時間でも鳩を追いかけて回す異常なまでの執着、車なんて眼中なし、道路上で突進し続ける本人で、マラソンのごとく、私も走り続ける毎日でした。

診断直後は私自身ショックでしたが、当時私のまわりにおいて下さった方々に温かく支えられ、本人そして専門の先生方と向き合うことができたように思います。

子どもはとても「こだわり」が強い子でした。「お金」の時は、目に入るものすべてに頭から体ごと突進していきました。他人のお金でも、レジでもです。その時は押さえ込むことしかできませんでした。でもある時、本人の通う体操教室で、お友達がお年玉を貯金した際にもらったおまけの手袋をうれしそうに先生に見せていました。その時先生がすかさず本人に「貯金したら手袋もらえるんだって、いいな～」と声かけて下さいました。先生には事前に事情をお話していて、それはとてもタイミングのいい声かけでした。本人は手袋には全く興味はなかったのですが、あまりにもうれしそうなお友達の雰囲気引き込まれたんだと思います。本人もきっちり貯金ができ、うれしそうに貯金箱をもらい(手袋ではなかったんですが)満足そうでした。それから嘘のように「お金」への突進がなくなり、「お金」についての情報が本人の中に入っていきようになりました。「お金」は生活の中に生きているもので、その都度、ルールを作り、対応してきました。もちろん、その間でも、小さなこだわり(両替や財布など)はできましたが、今ではこづかい帳をつけ、目的を持ってお金を使い(使い方はいまだ母とバトルですが)楽しんでくれているようです。

「例」をあげるときりが無いのですが、私が本人の「こだわり」とつき合ってきて、感じたことは2つあります。1つは「こだわり」は本人が不安な時に、特に強くなっていくもの。でも、その反面、「こだわり」は本人の視野を広げるきっかけになっているなどということです。もちろん、そこに至るまでに「前途多難」ですが、「きっかけ」は身近にころがっていました。

今私が一番大事だと思うこと、それは人とのつながりです。仲間、先生方、先輩方、そして子どもに関わって下さるすべての方々です。前述した「お金」のこだわりをとききっかけも体操教室のいつもと変わらぬ風景でした。私一人ではどうもできないことで、全てに感謝です。子どもにとっても、同様だと思っています。ただ子どもにとっては一番の苦手分野なので、私の役割として、子どもと人をつなぐパイプ役になろうと、いつも心がけています。

17歳になり、今のこだわりは土曜か日曜にショッピングセンターでする「カードゲーム」です。先日就労に向けて現場実習(作業所)を経験しました。その時本人が「現場実習をがんばるためにカードゲームをがまんする」と言ってくれました。今こだわりまった中だと思っていた「カードゲーム」を自ら我慢するなんて、正直驚きました。「仕事」という目的意識をしっかりとって、学校(支援校)で先生や仲間たちと共に成長している本人を感じました。

本人の成長を信じていいと思います！

(M)

一人じゃない。息子を通じて出会った人たちは、私の財産

息子は知的遅滞を伴う自閉症です。障害があると断言された時は真っ暗でしたが、どんな子であろうか育てるしかない、親が見捨てたらだれがこの子を育ててくれるのか、何かしなければと思いました。それからは、「自閉症」に関する情報は何でも集め、気になる療育方法は後悔をしたくなかったので全国どこでも行って学びました。もちろん失敗したものも山ほどあり、遠回りもしました(これだけ好きなようにさせてくれた家族には感謝しかありません)。そして、その中で知り合った人たちは私の財産です。療育する中でうまくいかずしんどい時や問題が起こった時は親身になって話を聞いてくれる人、助けてくれる人がいました。何より自分一人じゃないと思えた事は精神的に大きく支えられました。「どこかであの人もがんばっている」と思うと、前向きになれました。

10歳くらいまでは毎日言葉がなく奇声を発する息子の将来の事を考えられず、目標もなく手当たり次第(特に言葉)取り組みパニックを起こし、どう抑えるかに必死でした。10歳の時に出会った療育センターで学ぶうちに私は息子をどんな子に育てたいのかと将来の事を考えられるようになりました。そして私は「一生懸命働き、社会に受け入れられる子にしよう」と思いました。

具体的には周りの人のために役立ち、一緒にいて助かる存在にするために料理をさせ、働く体力をつけるために山歩きやマラソンを始めました。最初は指示も通らない子が今では料理が大好きで、マラソンは私がついていけないようになりました。私の指示が入るようになるというんな事を教えられるようになり、言葉も発するようになりました。

今、息子は二十歳になり、親元を離れ福祉就労をしています。有りがたい事にみなさんに可愛がっていただきながら毎日がんばっています。これからも私は息子たちが、モラルが欠け、何が起こるか分からない世の中で、私がいなくなっても安心して生きていける環境を整えてやるために学び続けた

いと思います。

最後に、20年前には考えられなかった生活ができるのは、今まで出会った人たち(家族はもちろん)のおかげです。感謝の思いを忘れず、生きていきたいと思います。

(U)

親の会の仲間や医療機関の方々に支えられて

我が家の長男は高機能自閉症です。現在は専門学校に通って、なんとか本人なりに充実した日々を送っているようです。

一歳児検診ではお医者さんに褒められるほどだったのですが、その後発達はぎゃく戻りてしまいました。名前を呼ぶと「はい」と言って手をあげていたのにまるで耳が聞こえないかのように完全無視、鍋の蓋を延々と回したり、積み木やブロックを畳のへりにあわせてどこまでも並べたり、他人を受け付けられない遊びに没頭するようになってしまい、当然全く言葉はでませんでした。後日主治医に尋ねると「自閉の自我が芽生えたのよー」ということだそうで、今では至極納得！！しています。

当時の地域の担当保健師さんの勧めで、発達相談や親子教室など勧められるままに参加させていただきました。そのときのお医者さん(のちの主治医)が「必要なかったらそれでいいし、障害が無い人が受けても発達にとってもいいことだから」とおっしゃったので、まだ障害を受け入れがたかったけれど訓練を受けることにしました。

それで訓練を受け、拠点保育園の障害児クラスにお世話になりました。そこでのママ友は今でもずっとお付き合いさせてもらっています。励まし合い、愚痴も言い合い、会うたび明日への力をもらっています。自分と我が子にとって合うか合わないかの見極めは必要ですが、訓練や親の会など良いと言われるものには積極的に参加してみたいと思います。同じ想いを共有できる仲間に出会うチャンスも広がります。

それから前向きに諦めることも必要です。私の場合は「この子にお母さんって呼んでもらえなくてももういいわ、だって可愛い我が子ってことには変わらないし」と力が抜けてから一年位して四歳半で急に二語文三語文で喋り出しました。焦ってカんでいると子どもも伸びることができなかつたのかなあと今では思います。

また、ご近所のママ達と話題が合わなくて寂しい気持ちになっても「私、みんなより濃い人生を生きるんだから」で自分を取り戻してきました。実際に濃いです。親の会に参加して大学教授の先生とお話できたり、いろんな啓蒙活動をしたり、普通の親をしていたら経験できないことがいっぱいできます。

小学校ではいじめもあったり、不登校も経験しましたが、親の会の仲間や医療機関の方々に支えられて乗り越えてこられました。

今本人は専門学校でしゅくりる場所と先生に出会えて、体力的には少々ハードのようですが、充実した学生生活を送っています。今後人生最大の難関の就職活動が待っていますが、前向きな諦

めもつつ、本人が無理なく持てる力を発揮できるような所を探したいと思っています。

(Y)

将来に向けて小さな積み重ねを増やしていきたい

息子は、今年ちょうど20歳になりました。2歳5ヶ月で自閉症と告知を受けてから約18年です。告知当初は、どう接していいか分からない大変さの真ただ中において、先が見えないトンネルの中にいるようでした。この子がこの先どうなっていくのか、また、私達家族はどうなっていくのか不安でいっぱいでした。

自閉症のあらゆる症状を持っていた我が子の子育ては、振り返ってもよく思い出せないくらい色々なことがありました。騒いだり、暴れたりする子供を抑えて言い聞かせたことも一度や二度ではありません。こだわりに付き合ったがために家に不要なものが、たまったこともありました。偏食があり、このまま同じものばかり食べるのではないかと心配したこともありました。

しかし、育てていくうちに子育てが楽しいと思えるようになったのです。何もしなければ一步も前へ進めない我が子ですが、ちゃんと教えればそれなりに身につけて前へ進んでいることが見えてきたからです。特に、こだわりなどの大変さは、子供が大きくなるころには、逆に利用して良いことのこだわりに換えてお手伝いなどをしてもらうようにしました。その積み重ねは、息子にとって大きな生きる力になっています。

頼んだことは、真面目にやってくれるようになりましたので、知的には重度ですが実習先の社長さんに認めて頂き、一般就労させていただくことができました。「体力をつけよう」「忍耐力を養おう」「人の話が聞けるようにしよう」「なんでも諦めずにやらせきろう」、その時その時、目標にしていたことには何一つ不要なものはなかったと思います。

これからも、将来に向けて小さな積み重ねを増やしていきたいと思っています。

(H)

家族で息子に寄り添って過ごしていきたい

現在21歳の息子は小学5年生の時、めまいがする、前日スポーツをしていないのに筋肉痛とか、わけのわからない理由をつけて学校を休みました。それまで学校に行きたくないと言った事はなく、突然の出来事でした。登校できない理由もわからないまま、毎日を過ごしていました。クラブ活動、調理実習、自分の参加したい行事には出席、他のお母さんからしたらわがままに見えたかもしれませんが。しかし親としては少しでも学校に行けるという事はうれしい事でした。学校も色々息子のため対応して下さいました。以前から通っていた学習塾、本人がやりたいと言って始めた習い事は続けて

いました。しかし普通に登校できないまま小学校を卒業しました。

中学校では2歳上に姉がいるため私も役員をしたり、姉の話から入学する時には息子の事は知ってもらえていました。入学当初はがんばって通学していましたが、やはりしんどくなり通えなくなりました。教室は無理だけど保健室なら少しの時間通えそうという事で、保健室登校が始まりました。初めは私も一緒に登校しました。少しずつ学校にいる時間が延びてきた頃、広汎性発達障害である事がわかりました。わかった時はびっくりしましたが妙に納得しました。それからは、保健室の先生が発達障害の子が過ごしやすい条件を少しずつ整えて下さり本人も安心感が増してきたようです。

卒業するまでの間、教室へ戻れそうな時もありましたが、行事の時に少し無理をしたため、また保健室へ戻ってしまいました。しかし、高校へ進学したい気持は強く、自分で選んだ高校へ進学し、無事に卒業しました。

専門学校も自分のやりたいパソコン関係へ進み、この春から働いています。就職もこの時期大変でしたが、くじけずよくがんばり通したと思います。親としては見守る事しかできませんでした。これから先何があるかわかりませんが、家族で息子に寄り添って過ごしていきたいと思います。

(K)

これからの方に… Part.2 ～二次障害(不登校)を乗り越えて～

今年21才。社会人3年目の春は愛知から神戸へ転勤になり、引っ越しの処理をすべて自分でやった頼もしい長男です。

小3までは順調で楽しく学校に行けていたが、小4では友達とのトラブルが増えていた。友達が差し出した手を握り返せなかったり、じゃれあいができなかったり…。「大人の中で育った子だからかな」と思っていた。2学期になり週に1回、2回と苦手な教科がある日の登校を渋り始めた。献立表の美味しそうなメニューに「給食だけでも食べに行ったら」と誘うと「代わりに母さんが行けばいい」とそっけない。坂道を転がり落ちるように欠席が増えていく。それでも連れて行くときちんと過ごすことができるので、無理やり送って行ったり、先生に迎えに来てもらったりしたが、そのうち朝になると「頭が痛い」「お腹が痛い」と言い始めたので、もう無理だなと思った。

小5に進級しトライするがすぐに挫折。担任の先生から「お気持ちはわかりますが、勿体無いから給食を止めたらいかがですか」と言われ、学校との繋がりが断ち切られる不安を感じた。しかし先生が「これだけ大きな学校です。急に来ても1人分くらいどうにかなります。いざとなったら私の分をあげます」と言って下さり、その気持ちが嬉しかった。それと「休みますの記述でいいから連絡帳を毎日出して欲しい」と言われ、学校からの配布物が毎日届くようになる。秋には「強くなりたい!」と、小学校の体育館で練習していたスポーツ少年団の見学に勝手に行き、「入りたい」と言ったので、「学校の体育館だと同級生に不登校のことを言われるけど、それでもいいのか」と念押し決意を確認して入団を認める。高校まで続けたのは自信になった。

6年生になり運営委員会に入りたいと言ったが、経験不足により却下され、代わりに「自転車安全運転競技会」の選手になり、実技練習と学科の勉強に励む。大会が終わり、目標を失いました家で過ごす日々。それでも運動会や修学旅行には参加。だが、それをきっかけに学校に戻る気は全くなかった。本人は別物ととらえていたとのこと。卒業式にも出席して小学校を終える。

中1になり頑張るが登校していたが、6月の中間テスト後また行けなくなる。

フリースペースへ行かすことも何度か考えたが、費用や交通手段の問題で行く所がない状態だった。当時の彼は1日のほとんどをパソコンの前で過ごし、週2回のスポ少と、天体観測会「吉備宇宙クラブ」が居場所だった。

中2になったものの学校には全く行かず。今度の担任の先生も熱心で、想いに応えられない我が子がもどかしかった。高校合格の手続きで中学校に行った時、受付をされていたので「彼に発達障害、ADHDの可能性ある」と話すと「どういうことですか」と聞かれ、「私自身にADHDの診断がでたことで、彼の行動、性分が非常に似ているんです」と話すと「僕は彼に出来ないことをしろ、しろと言っていたんですね」と即答され「分かってくれる先生がいた」と救われた。

中2の秋、不登校仲間のママから適応指導教室の存在を教えられ、教育相談室で長男と二男の相談を始める。予約の時間に遅れる母は困ったちゃん。相談室側はまだ本人にその気がないのかと思っていたらしい。それでもなんとか話が進み、自力通室も可能で中学生の多い教室に決まった。「中学になったら学校に行く！」と言った弟が2月から通室開始。2週間後に彼も通室開始となった。

3月になり、たまたま学年末試験が翌日からあると知り、試験を受けに久しぶりに登校。そのまま学校に戻ってしまった。

とはいうものの、朝から登校ではなく遅刻と欠席の繰り返し。5月の修学旅行までは頑張る→6月の合唱コンクールまでは頑張る→部活は楽しい→1学期を頑張ったら夏休みに適応指導教室に挨拶に行こう…と短いスパンで明確な目標を掲げたのが良かったようだ。

弟は入学後オリエンテーションの1週間は頑張ったが、授業開始と同時に「僕は適応指導教室に行きます！」と宣言。毎朝鞆と弁当とラケットを抱え自転車で最寄りの駅に行き、JRと路面電車を利用して通室。帰途部活をして帰宅。この通学経験は高校通学の練習と自信になった。

長男は3時間目登校でも一緒に行く級友が近所にいて助かった。2人なら心強く教室に入りやすかった。級友に恵まれ、だんだんと気持ちも学校寄りになっていき、彼の選択肢から適応指導教室が消えた。

工業高校に進学し、資格取得や検定合格をするとポイントがたまり、条件を満たすと表彰してもらえると知り「資格は切り札です。持っていても邪魔になりません」と母の言葉にのせられチャレンジ開始。明確な目標とポイント制はゲーム感覚で挑戦出来た。また、朝は「起きたらご飯を食べて用意して出発。パソコンのスイッチは入れない。母も不必要に話しかけない」と決め、衝動性と好奇心について引きづられた、中3の二の舞にならないよう対策を立てた。「発達障害の可能性ある」と伝えると学校側も見守ってくれ、夏休みに発達検査をして診断が出た。

1年が終わった時担任から「よく頑張りました。もっと不登校の状態が悪いかと思ってました」と言われた。さらに、県知事顕彰をいただいた高3の秋、授業中に先生が突然語り始めた(クラスの子の大半は寝ていたらしい)。「実は君は受験の面接の時、2対1で落ちてたんだよ。不登校だと実習の多いウチは無理だってね。でも僕がこの子は学校に行く必要のなかった子なんです。現にペーパーでは合格しているのだから、合格させましようと言いつつ切ったんだ」と教えてくれたと言うので「だから1年の時心配で受け持ってくれたんだね。君は不登校と発達障害の子に道を開いたんだよ。先生は自分のプッシュが間違ってたなかったと嬉しかったんだよ」と話すと先生の想いに泣いていた。

勉強会で、発達障害の「障害」はハンディキャップではなくディソーダー、困難さを表す言葉。「障害はその人自身が持っているものではなく、本人と周りの人との間にある見えない壁や溝の存在、それが障害なのです」と知り、自分の特性を受け入れている。

(ははねこ)

39 オで診断が出るまで発達障害が分からず奮闘した少女の回想記

何かにつけ不器用。劣っていたのは早生まれのせいかと思っていた。

小2の時級友に「明日は私も持ってくるから、シール持ってきて」と言われ、信じて何日もやられ続けた。ドッジボールや遊びのルールが覚えられず混乱。鉄棒の足掛け回りなどぐるぐる回るものは大得意。塀や物置の屋根に上るのも大好きな元気いっぱいの子供だった。

小4で学習班の班長をしていた時、自習時間がうるさく、先生に「班員を注意したのか」と聞かれ、他の8人の班長は注意したと言ったが、私は注意していなかった。というのも周りの声が気にならなかった。この一件で自分は何か違うと感じ始める。

5、6年は厳しい先生のクラスだった。左右がいまいち分からない自分に気付く。また、不注意の部分を担任に指摘され続け、叱責される毎日。それでも「先生の言われることは正しい。出来ない自分が悪い」とけなげに頑張る。「学校に行きたくないけど、休んだらそのあとはどうなるんだろう…」とそのあとのことが怖くて登校拒否もできず、「消えてしまいたい」と思いながらも、毎日の心のキズもADHDの「抜け落ちる部分」が幸いして、「明日は大丈夫かも」と思えたことと、学校が好きだったことで登校し続けた。6年の秋にはとうとう限界。心が折れる寸前まで追い込まれた私をさすがに母は気付いたらしく担任と話をし、翌日から担任の態度がガラリと変わった。

中学校では、ちよと変わった雰囲気から吹奏楽部の同じパートの同級生に子分にされ、いじめられたりしたが心までは屈しない自分があった。2年生になった時彼女は転校し、その後は穏やかな日々になった。

友人に恵まれ落ち着いた高校生活により、幼少の頃からの吃音は治った。先輩からは「不思議な子」「変わった子」と思われていた。高3の時通学路に図書館が開館し、毎日寄って本の整理を

楽しんだ。

事務員として就職したものの、日時の勘違い、電話の聞き間違い、作業の先送り、散々な状態にとうとう上司から「せめてこれだけはしてくれ」と言われる始末だったが、5年後出産により退職した。

生活は同居する姑が手助けをしてくれていたが、3人目が生まれたことで、私のキャパを超えた。そして、末子が2才の時に姑が亡くなり、ペースメーカーとサポートの手がなくなったことで生活が崩れ始める。

1学期に教室がしんどかった4年生の長男が理由をつけては週に1回、2回と休み始め、3学期には完全に不登校。4年後の中2の秋に市の適応指導教室や相談室の存在を知るまで我が家の冬は続く。

診断が出たあと中学校時代の恩師に会いに行き、自分が発達障害だったことを説明すると理解してくれ、「よう授業中寝とったなあ」と懐かしがられる。当時の私は自分にまさか発達障害に起因する睡眠障害があるとは思わず、「別に深夜放送が聞きたいわけでもないのに夜眠れない。明日遅刻したらどうしよう」と不安な毎日を送っていた。毎朝母に起こされ、慌てて登校する。社会人になっても同じパターンだった。なので今は「夜は早く寝る」を意識し、生活リズムをリセットする為に朝、新聞配達をしている。またパターン化を好むので、向いている仕事でもある。

自分の特性を理解し、物理的に苦手な部分は生活の質の向上のため薬の手助けも借りながら、落ち着いた日々を過ごし、勉強会で知り合ったお母さん達と親の会を作り、「お母さんのほっとする場所」「子ども達の環境整備」と「二次障害を防ぐ」を目的に活動している。

(ははねこ)

挑戦する彼ら

知的発達障害のある人の自立・社会参加を目的として、スポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を提供するスポーツ組織、スペシャルオリンピックス(SO)、いつもどこかで活動しているから複数形。

オリンピックと同じように4年ごとに世界大会が開かれ、今年6月25日～7月4日、アテネで世界大会が開催されました。

昨年ですが、6月にオーストリアの夏季ナショナルゲームがザンクトペルテン市で開催され、姉妹都市である倉敷市のアスリート達がこの大会に招待され、その一人にK君がいました。

K君と初めて会ったのは4年前、ぷれジョブという仕事体験を続けていた彼は名刺を持っており、その時私の他にも数名いたのですが、彼は迷うことなく一番に私に名刺をくれました。順位がわからない時は高齢の者から渡すというビジネスマナーを熟知している彼でした。

K君は水泳の自由形50mと背泳25mにエントリーしていて、ご両親初め多くの声援を受け、まず自由形に出場。屋外の50mプール、水深は3m(!)、そのうえ3月上旬並みの寒さで「日本だったら中

止になると思う」(お母様談)。そんな異例な条件にも関わらず、力強い泳ぎで25m過ぎた時点でK君は1位！このままいけば金メダルだ！！しかしそこから予期せぬ事が…。

フライングをした選手がいて、K君は途中で泳ぎを止められました。2回目のスタート後、水中から浮かんできた彼は…、なんと、平泳ぎを！！！！ご両親は「クロール！クロール！」と声を限りに伝えますが届かず、結局最後まで苦手な平泳ぎで泳ぎ切り(今まで25m泳ぐのがやっとだったそうです)、結果は最下位…。隣のコースの選手が平泳ぎを泳いでいた事も、彼の行動の誘因になったのでしよう。

お父様が連写した写真には、プールから上がり2回目のスタートに向かう彼の表情が記録されていました。異国の地でたぶん日本語での説明はなく、なぜ止められたのか自分自身に問いかけながら、彼はスタート台に向かっていました。「どこがいけなかったのか。どうすればいいのか」真剣なアスリートの表情で。

「SOは他の人に勝つ事を目標としておらず、アスリートが自己の最善を尽くす事を目的としている」、彼は立派な金メダルです。心に残る金メダルです。

背泳では見事1位で、実物の金メダルも手に入れた彼は、ご家族とともに一生忘れられないオーストリアの旅を終えました。

障害デイサービスに通うRさんから、時々絵手紙をいただきます。震災の時に書いてくれた絵手紙には、こう書き添えられていました。「日本は大変な事になってしまったけど、一人一人の思いや気持ちも大事。心がおれそうなくらい心配ですが、その気持ちも忘れずみんなでがんばりましょう」。彼女のまっすぐな、気持ちがびんびん伝わってきます。

Rさんは最近、障害者アーティスト作品募集を知り、「応募しようと思う」と瞳をキラキラさせながら、話してくれました。挑戦する気持ちを持った彼女から、物凄いエネルギーを感じたのでした。

子ども達の背中を見守り、時々そっと後押しして、いくつもの波を超えてきたご家族の姿が思い浮かびます。それも一緒に応援し続けたいと思うのです。

(そら)

【裏表紙絵】 NPO法人岡山県自閉症協会の皆さん



「つくらいでまな
ことがあつても
いよね

だって人間だもの

すね